

先月北海道旅行の折に、旭川で三浦綾子記念文学館の庭を見ただけで帰りました。その時、言い訳のように「作品を読むことが大事ね」と言ったので、帰ってから、彼女の最後の長編小説『銃口』を読みました。読み始めた時、主人公・北森竜太の純真さ、素直さ、優しさに驚き、これは児童文学ではないか、童話ではないかと思ったほどでした。ところがこれは実在の人物・小川文武氏をモデルに、実際の事件・「北海道綴り方教育連盟事件」を丹念に調査し、取材して、書かれた小説でした。



銃口 表紙 小磯良平(1941)

竜太が成長し、初恋の人・芳子と結婚式を挙げようとする直前に事件が起きました。時代は1941年、場所は北海道の幌志内(架空の炭坑町)です。同じ年、北海道の岩見沢で、私の両親が結婚していますので、両親の青春時代の背景を知ることになり、ぐいぐい、引き込まれていきました。

竜太は小学校の担任だった坂部先生が生徒を分け隔てなしに可愛がり、自分の思いや考えを自由に表現することを尊重する温かい人柄、また人の悲しみや弱さを思いやる



西興部小学校々史資料

よう自らに厳しい姿に触れて、尊敬し、自分も小学校の教師になる夢を持ちました。質屋を経営する父親は、その日の暮らしに困る貧しい人々に親切であり、人に言えない事情を抱えた人にも親身に接する人物でした。教師になった竜太は仕事が楽しく、生徒を一人一人可愛がり、面白い授業をし、学力をつけようという事しか関心がありませんでした。生真面目で、自分が教えられたとおりに天皇を尊敬する純真で初心な、ある意味で成長しきれていない部分のある若者でした。

ところがその時代、学校現場は教育勅語、奉安殿の御真影への最敬礼、宮城遥拝など天皇を現人神とする国体の本義に基づく教育が始まりました。思想、信条をチェックし、国体に合わない考えを持っているのではないかと疑われる人は、治安維持法によって検挙されていたのです。竜太は作文指導の講習会に参加しただけで、突然、児童に自由に作文(綴方)を書かせる行為が「貧困などの課題を与えて階級意識を作り、共産主義教育を行おうとした」などとして、治安維持法違反で道内の教師60人以上が逮捕された「北海道綴り方教育連盟事件」で逮捕され(毎日新聞)ました。拘留されたまま、辞職願を書かされ、弁護士はおろか、面会もなく、全くの孤独のまま8か月を過ごしました。裁判もなく釈放されましたが、嫌疑が晴れることはなく、特高が見張る保護観察処分の身で、教職免許も剥奪されていました。非国民のレッテルがはられ、自分と関わり合いになっては被害が及ぶことを恐れて人を避け、許嫁芳子と家族だけが竜太の慰めでした。いつも背後から狙われている恐怖がつきまといました。二人は満州へ渡れば、自由が得られるのではと夢見ましたが、やっとかぎ着けた結婚式の直前に召集令状が届きます。

竜太は満州で軍務につき、幸い酒保部という軍隊の売店業務をして、実戦には参加しないまま、敗戦を迎えます。部隊は解散し、敗走する時、坂部先生が「どんな時も自分を投げ出してはならない」と最後に旭川署で対面した時告げた言葉を胸に刻み、上官と二人だけが武装を解き、逃亡します。この時、朝鮮の抗日ゲリラ隊長に捕えられました。その人こそ、昔竜太の父が自宅に匿った北海道の炭坑のタコ部屋から逃亡した朝鮮人だったのです。二人は助けられ、祖国の土を踏みました。

無条件降伏を受け入れ、竜太を無実の罪に陥れた治安維持法、国防保安法、特高警察法などは廃止されましたが、あまりにも多くの命が失われ、竜太は自らの責任や無知だったことを思い知らされました。それと共に忍耐して待った芳子、親切にしてくれた戦友や命の恩人の尊い犠牲に感謝するばかりでした。戦前の皇国史観による教育が、権力者の意のままになる、疑心暗鬼の世界を作り、命を軽く扱い、竜太を大きく廻り道させましたが、竜太は再び教壇に立つことが出来ました。

三浦綾子は「あとがき」で、「なぜか本当に終わったという気がしない」と記しています。あの戦争の責任が明確になされていないからでしょう。そして、今また秘密保護法が躍り出ています。